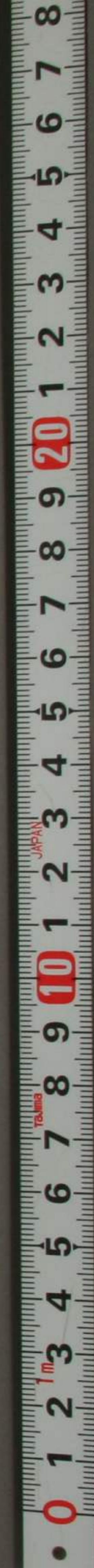


前太平記圖會

五

特
1830
11





前太平記圖會卷之六

目錄

鳥海合戰義家朝臣武勇
 賴義朝臣七騎落
 官軍諸將没落
 小松柵合戰
 亡瑞鎧之合戰
 衣川城合戰
 頼義朝臣入鳥海城
 厨川城火攻敵將討死
 負任死戰宗任没落
 宗任以下出降人
 負任頸臺京都新羅三郎元服



頼義朝臣上洛賜恩賞
 宗任奉仕八幡殿
 真衡與秀武不和
 清衡家衡與秀武同意
 義家將軍奧州下向
 真衡與秀武和睦
 義家將軍攻金澤景正驍勇
 義光朝臣授祕曲於時秋
 義家朝臣觀雁行知伏兵
 金澤柵沒落武衡家衡被誅
 義家朝臣逝去義親流刑
 甲賀山合戰
 為義武勇賜恩賞

前太平記圖會卷之六

鳥海合戦義家武勇

天喜五年十月上旬官舟下着の間軍勢を報の催但ありしうども暮るしを到
若せられをて聞登れ半ふあさされ不日進發ありし其要意際より多
負任も移し聞て金為行が河堰城に全兵を留めしを營し鳥海に待けり
去程ふ大將軍を海軍押寄りて網を敷し夫合して既小軍始り多し僅千八百
餘騎防ぐに四千騎も倍り且六宮主の勢異なるのみ河に暮衆の力別ありて討揚
すまは様もあつたりしをみみ我を春の富さか比し令以真毛の狩れしを
若しとふと六太夫も厭はぬ細哉とも物もせは晝夜四日の間息も休れず
間城中に浪舟大勢ありしを防ごうとて見しころりたる其木の成刻斗より寒
風烈しく吹落し隙雲道瓜流し佳木忽ほり依之官軍兵報勝送の役りなく
一控もあつたりしを以介お弱しとみみ及瓜引退し惟幕と張せ陣を揃へ陣

前六

合軍勢を止し去報運送の命渡ゆのと徒ふ一兩日然と色しける陣中にこれを察して
河舟勝勝を七も小懸し門切り切りし官軍の戦ふを義家もつりたりしを
駭を晒さんより秘し死んをせし所せあく備をきく相とさうを如る去極不入
火と敷して残たり或は徳と落さる押し首をぬもつり突遠く死るるもあつ思ひ
く小振務なれしを流石は一兩日飲食必し精力劣する若たされし逐不用廢さあり
嫡子八幡を即ち我家に以りし所を定は坂戸利友則的加藤右馬允景兼教位和
氣致輝日為清等孤たおまを運去武百又振務ををたつりしと馳急り流る
其徳刀弓精神のてりて古今比難きを若もかし今約より百五勝幾つし小
雲の走るがめく風の殺するごとく飛で一矢も放を村落まほしつりなく復は
云は河方の奴したる所小かけし陣を破りて自れ敵切し落し半其殺とま
らぬを今しと向ふ若活し帰るるかつりりし小控を即ち貞と其母武百勝とら
はく安倍時任が七百餘騎小取圍は流し結れは流し見する所を義家約は十文字に

武國古
先師法橋春甫
洛東祇園社代
徒馬小画所の
園分撰写以

義家
勇力之
圖



蒐へく義家くあわつてむな光貞也高くあつては角八面小切く白くは六時
任勢これ瓜見をくく八幡殿の加勢也中云程はあまふ瓜棄く迎へは義家と
かたは進め小付任も味方と敵は是とくやあひん返へ合せくわけ向ふ義家つひに
白くは角廻りて掲げ馬杖五丈計掘ゆを歩ゆは兵を棄く起しも立は前と掲く
と云お棄又馳白くは馬所伯父河内冠者頼任二百騎もく黒河内即正任が千騎騎
也蒐合せ退り進めは我はひ一其中小かひ福里河内殿の清勢今物よりは是合も士
率はくは勇とるん志高く清体息作義家法清はく一軍は是とて是作とつ
候小馬の鼻瓜並く進めは正任は威を辟易して一紙也と及引退く義家物
后と迎へ勢も目もかひは是も清方を救んとて蒐白くは馬所も今とては角
所小陣を張く掘り掘りいふつては角はなん清方は是とては是もなく平沙渺とじ
て駿背波小壘たりかやける所小大將貞任千と二百騎計もく晴軍してゆ
る瓜見付これぞ中判るまてて討張るるる兵二百騎孫を真縛ふまては

中書もせ寄ゆく一見見ぬ款の程勢りまふながく進も軍志移りて未くの款小進
候中のは跡志候ゆる義家小相向くも怒られ軍は是の候と高声小席云はひく
祖せりけいひられ貞任聞く勝と款の言か一人も候は付るまては中に引包ん
て火あふせんと掲げりるるえ本も勢に小勢るれをけよなくもさうけせよ一騎
も十の若共が今日と限を狂ひ一程よりよ程進かこ小隊も散散離合の分置の
候も程が神肝より物一軍備楚頂羽が骨肉を假し勇力もは折れぬとて
見しよりるまこれ款も大半はれつ令あつての恩意も是と捨殺うつて迎りさ
義家もあま敵陣中に坐せりて前後左右瓜見ぬも若討死せりといへく坂利友
則ちより外續く清方はさうり等今は是とて將軍の御向後光来かやと流
二騎取く返へ候ひり款候ももは義家先中と迎遠へ一程小跡より引退方と
軍の進め也意得く返へ合て同士打を所もあつて運の限と思ひ定て懸小自
害する者も多りのるる義家物居と引遠くとある若水に流二騎馬と打へく

頼義
七騎
おろ
義家
先
弓勢
之
圖



敵十方より雨のてく小村の築城も敵に射ぬの神威さへはまき勢申の蒐のりく
令と際とせし幾なる其勢傑然として河邊人間の折るも見へる多し業進も責
あふんを見へる下も流石七騎の敵るまふそへ鬼神ありとも何程の事あると
少士卒と勇様を屋瓦の固合せ攻まき夫将を懐に射さるるかやへ一程不将
軍の沖馬入半の第三筋負へ懸たぬに京通とれをえんく天晴良馬もろかや
蒐ゆるまよ業進が才藤三業信とて血争の若武者ありく商團立の荒駒の
槽もろろ小打騎くもの若者も向く下知して居たりし義家の射路も夫筋を此
地より昆泳く小射返すま例不あるるを京通遠より馳よる即未と首と波
さどせ下重く業信を助け駆け京通かろくや笑ひ居るもよふ騎とて必果に手
負と助け陣を居る保言せし業信が首と欲かれば馬とせし不空守とて向く
雲がぬく引退れ鞍のこころ塵打ぬに將軍と京通又欲陣小蒐入るゆへ
ろろ見物ありゆる小義家約后の沖馬も亦流石のなる小射され屏風と返れ

我軍と澄を蹴く下之好し則明遠小を見くいで馬ぬく進せし
又急げ馳せり小何有る其名字いし杯も物奥爽小澄と葦毛の馬けりく
進よ小務る武有あり則明打んく是も在日幸の幸い討あぬくの駿豆られ疾りく
其馬進よ八幡殿の沖用小ま一若るれ其芳志よ令い海小福小た一疾くや
けはは若者よ怒く情と欲の難さるるゆへは馬と海小賜んを代小海首と五
やらふもふを刀扱上んとするまよ小賢の振舞や也別時はい潜く後に血り大の男は
上平廻り妻小小櫻げ弓も小かの馬はは孤なれ沖方の陣引んせしはかたが
てははととんと十式三騎將を泣く退きたり別時振返りんく依る海小は若の令
孤救んてそを幕く免さる進一得とせん中を信小彼男と揚上る夫声をうけ
てら秋五六斗投りけは起も事とてたろかり退けり一若元もそ勇力小
思はくや討るんとする若も中まの死骸を楯小載くお免くとして引退く別時
かの馬と引く八幡殿小なる義家約后と夫種も悉く射をしはひるはれ

に打撃く父ふる徒七騎將軍軍中下包く敵陣ふかひ入く持走くや或る業道こ
しと子と播きて付ぬ進せんと思はせども僅七騎も斬され武百騎も傷くる兵百騎
計ふ討たされ右佐佐木進ぬる軍と勢のまわふよりいよいよ寡の國ふれと欲と
うれとこをやは僅七騎の力とりのく武百騎の堅陣に敗る方なきをゆく一生ふまひ
あふ上右のふ先陣を圍ば末代を有難く安ふ一人あふふ人々をせやひなき

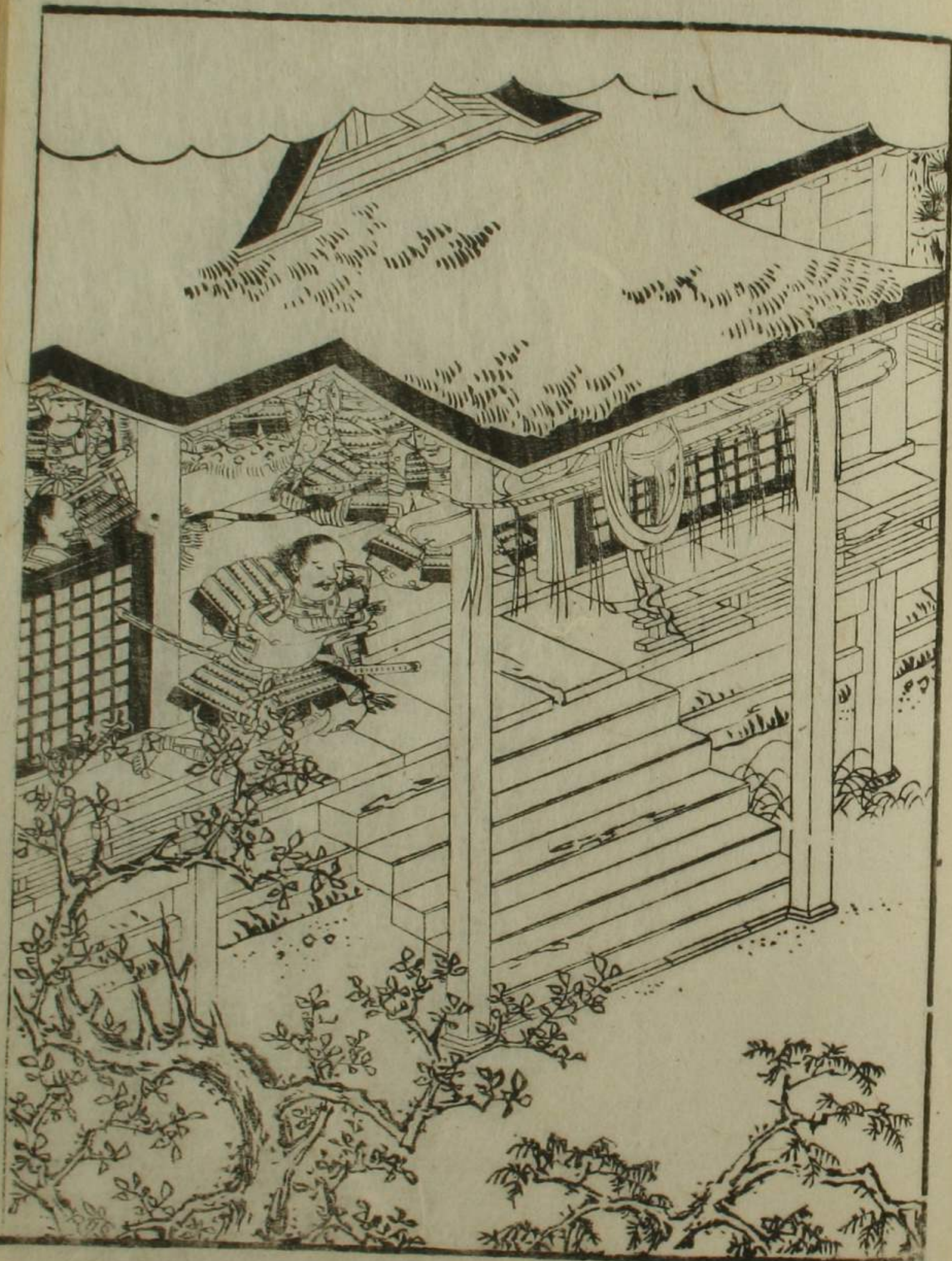
官軍滿將及處

相模國の佐人教佐佐伯經範と藤原秀郷の後胤とて坂東の駿勇も將軍軍を
考致せられ今なと一方はたおとて東の攻けお居られ今給う敵前所の我ふ子の
者悉く付せはせども其身を事とて重圍を脱出將軍の津在所を尋て
かこや走りしと更し津所方もこれに方以成と打るめなる安小安備は子騎
計ゆく敵流方此討記の戸骸乃中以若宗徒の人を其首やわんや搜求る成見は事
迫くせとせ要り大馬声ゆく名宗る相模國の佐人教佐佐伯經範多幸の武

恩と妻取に報せんお主徒は騎も今と小推案より其形る旗の紋をみるふふし
任の陣せんとし経危攻敵ふあくと不足あるまうれを疾出令く勝負もせ
り目の赤ゆく敵武十騎は射殺し今いほせと直に退幸なりとく即ち所出長
そと実遠くお死する出羽國佐人平吉史國妙と智勇兼備の猛士もよく小
勢とを向く大敵を控く毎度勝利を得どとす幸か一國之世と蹄をきて平不
負とせとる今なと一陣の軍將として三百餘騎も進ませるが敵軍の無合小或
付と或る藤原今と之指騎も足さうゆれも敵を機を屈せし敵の陣は敵の軍
敵もたさうゆれも小貞任元末國妙が武勇小愛く天晴流ひましく我方人おせりや
思ひらる今日國妙が働と物小公悟く思ひたれば法軍勢小向く相持く不負を
付たふ敵止捕ふまへしやかく申付たる程小兵も人も怒や馬を引ども主狐
射れやう馬を射外して加藤ささく虜やせんと相持たれども還さず衆殺す
引せられ今給う五足まで射せられども未だ死事かうりなき去程小保氏の

陣を不敗せしむ敵をいよ大勢小成り十方小克後より國妙が兵二十騎
みま今と最後を絶しこれより又騎三騎で相かこうの二百騎かこの二百騎不
今このひくも敵ひる中にも國妙も良馬を乗務と後不立させ貞任が陣不敗へく大と
敵して残ひる小十方より雨のてく小射ける矢國妙が馬の顔骨より敵小徹く相試
飲くそそりる馬を屏風と作まごくと争うるまもはさるるを敵衆も
なく下さるる起も立に搦たり助起せんそ落合るる人の即も何く搦されたり
やぞ大將の本より居たりけし貞任打見たりや殿跡じや何ぞ不ぞ一たむひ
終る搦や成りひし我も國妙が笑く不思議の事成り小おふ搦や成りも不
そよあはに搦得るるもそよあはに唯天運の御も志むる所よりそそきの事を云ん
より早首を斬り貞任まじく將軍頼義といふ成り小ぞ國妙國々一族從從
悉く忠義小令成捨一人も生残るる若るれば將軍の所在所おる若る一也
文道と申し石人ば是回終るるを申ける初と歌さるる程小若る若る若る

痛く腹成もまろり小貞任打とも面を相けけいへるを承るとの式清忠のごとくた
の武士又世より有難しこれと救えん事いと情か日本に武勇唯今に於て神妙
なるも感して令成助けやせん疾速守衛より保るるをそそりて即從從は從從と解
脱し右刀成も進も後月の合戦も我も見奉り入るれば色代りて馬の成り
素從軍勢相具して柵より外より思ひの外に奉勅するれば貞任も兵も
尤侍の事より相構く不負と生捕討ふなれば搦ありやそそりて何様も遺恨
あつて悲しき同成りせしむるにんぞ杯の事終らんや思ひ成りてをさしむるも
たる網裏の真又海を不棄るるやそそきの骨を折るるよやほやれよあもまかり
けり貞任も初命と助垂く國妙も恩成りて一定味方小参りかんそ斬る情成
かけしそあり内舎人藤原茂頼將軍此腹をみく毎度戦功を祀りそ雙の勇士
たるはわ搦る小清方敗軍此後將軍清父子の在所を志しけりかこせ若る若る
よも討せしそ冷る若るそ思ひたりれば先きく陣陣し終りて



内合人 茂頼
 敵と針く入通と
 河田宮々々
 將軍七勢の人と
 老の徳守殿
 陣一歩
 〆



鎮守府小幡をなれどもいまだ府小に在るに及軍の目より今日六百及んぞ所仍方の
志まざるに依り清生害殺かしてく天地に俯仰し歎とらる今い行時と令居く何の
せん冥途の清生とを仕はるれと物具脱刀と腹小突えんとりたり又思ひ返りたる
る何よ清運をさせんとくはしとの將軍清父子は清散を執ねる者も斯く
空く我場の塵小理ん事こそ無念なるに及賊の子小波ら必は来本に掛く曝
るくおも朝廷の忠臣天下に去將る清子の却く朝敵の務小亡れ賊徒の軍門
小曝るは源氏小秘ある家人の斯くかき若人の如く傷ん事今生の妄念未代
との瑞瑾るは我遇今日まて死候するこそ幸ひされ彼我場小返りき嚴と
拾ふ危しれたらん款事本にかけたりとも是非奪ひぬる教書しなり其後冥途の清
供孤こそ急へん但し兵革此衝所は低くはれ故あ中びへ一方小髮髮を剃
作く信侶とあり尋事者此骸骨を所縁の傍に拾ふべく小計小危しとて煩く
自ら利落し黒衣一袴求しこれのてく出まると人小も具世に唯三人のりしや

戰場中を都とる將軍の大藤内分國を清出ありく後者獲る幸もやとく道り
斯く小申然たごろく主従七騎落れしに程思人の外小日教を經くあるは若小前田
宮小着居りて中鎮守府の形を聞くと其賊徒入替へ其上ゆくの謀ありとて
志つて休むありし所小茂頼入道と初も志つて海へと一達小走らるる折回の
神花を通る所社頭小人の形勢をり為事此来清人よと思や何の心も若まらと小
流石主従の契とて奇く小かをたりとて神を伏ねとて一足とて独り小ま
將軍御父子はと先進をせ加藤之宅法原前藤坂戸等あり茂頼の妹とて
物とも得云はれとて計もく相落して踏踏り將軍清御んや見はる藤原
茂頼が入道したるなりを荒思ひ若くやいなる姿ぞや中室ひれを入道指派を
ごめそと清生害の事い首へともなせざりしかど朝日教を拜く清生所これ
かり所不思儀の事も出来ぬる事やなと相落り結瓜取と作らんとめは
形と結瓜今敵陣小勢と作ら再び形を奪へしとてはとらりし小や

曰く喜入且うち海く巴の胸中狭くせしは將軍甚威しは以利髪の幸の劇さふ
似らうとすども忠節の淫れ幸又頼ひあつたつては鎮守府の権を成しは欲の
入勢りたるやらんと同様のは府中い未と事幸小作と申なる程ふまの陣ありて
思ふ通甘くあつと小作とて打連鎮守府小作法入なり

小松柵合戦

奥列の晝夜合戦止む時る或之官軍賊徒を攻ま軍勢微りて責を
あつた或之賊徒鎮守府公圍とも謀拙して引退と唯旅のむとせせは幸は使丹
善康平入幸小成のり後之重く評定ありて出羽國の光頼武則小頼多加勢と
乞得光頼とを要むと二変せは合身武則と子ゆりては幸とて是れ幸向
はるべと首領と返言しつ則尚本東京郡宮岡と昔射坂上田村磨帳表公延る
月日所も軍士衣整りしを程りて本号して官軍中よりは是れ幸は
佐例といひ具公延の使宣といひ言めしこもく合身とまきあり申送りははは

三子外騎中く出陣あり先達と武則と子牙延相傳し其勢一乃外騎中く出陣出
月年八月九日管岡中く待受が將軍對面ありて互の公懐を陣らと喜勝と幸斜り
日く十六日出陣ありてとまのりては陣の押使を定ら武則が長男荒川と船渡
京武貞を二陣と武則が甥達志方と船橋貞頼を二陣と吉秀武と三陣と
新方次船橋頼貞を四陣と將軍の陣ふ打せしは五陣の中小三陣分てり一陣と
將軍一陣と武則一陣と國内の官兵と二陣と斑田四郎若菜候武忠七陣と貝澤
三郎清康武道倅小武則と子共たり武則真人馬よりりて甲辰辰若首路始して
進小守柵を指し天地と地とを長眼小子牙延と將軍の令に應じて八幡三所
が中丹次照しは身命公延と死力を注ぎんは必神徳の中く死んと武則は
右よりこれ公延の法軍勢威涙を流さるる若あり己小法軍使を行はる軍
旗公進のり山崎一表軍上小朝と幸早小羽公延先車公延とて進りありて是
八幡官の権獲しは瑞穂の中法軍と幸を指し勇進とて馳り其日之報并

郡中山大風沢小宿し多しと翌日申刻不日郡萩馬場小若孫より宗任が叔父
 備良殿が小松の柵へ其間僅五所斗りたりとも昨日柵を攻らざるを即ち小陣
 及び加を多し節上二陣四陣の陣荒川右所武貞新方以所頼貞二人密に合を
 小松柵の案内然んごとく陣中と悉出歩兵十餘人を召具し二件の柵に迫りたる
 変具具たりたり歩兵等いご城中次劫して敵の動靜を伺ひて柵外の左家武三本
 木火をかけし其時節山風吹落く忽十方小煙蔓り餘煙城中吹捲られ其後
 以外小騒ぎ驚破敵の迫りたるをいづる程に我も是固を致し矢陣ひひし櫓出屏
 の上を駆け上りて月まじも月まじも此頃暗く圍に何れも敵ありとも知れずも矢
 羽後ち石を飛し上矢下と返り官軍の心をく我もく先登を率に官軍
 兵則小向く多しなり昨日の我も率に南側の城ひはれ懸せり其是兵と機と
 ころおぼしそ日射を推しされば宋の武帝は性亡日法避けて我く功ありと
 今夜軍攻進しとや又昨日と待たれや好兵操と見給へありと武則の白官軍

の怒水よりも速小火よりも嫌う其陣あるは兵を用ゆるの機は時小色ト疾沖
 陣を進られ物づく仕んともやれはれ我もたを思ひしれんと頼之旗の子
 孤進免給ひ騎馬の武士成りつと要害攻圍をせ歩兵をとりて柵に迫りて其
 叫んく攻らるるもあまは城東南の若澤流は源く西小を青藜時らましく所の
 精兵猛率も竹小派とあり將軍誰とあり子の軍士多あり是地合せ所方と進め
 や宣へい五陣もありたる面を面もいれ身を惜まはるふく一生忘れ持まざる
 我らる宗任忽ち用籠と柵う内は親中引志つ息とせ終らざるこふ又七陣の陣
 頼貞は二節武道と城の後たる櫓に要害をなす是れ小宗任が精兵二千騎もて
 出一文字に就教する武道これぞ侍をる道中二百騎の中に我れ火水とせん
 且多く款も志り悔り退りて我れ其勢を待て是れ公精力芳れし引く令
 武道得たりや賢と近入詔ふ引流く関より内小切く入る迫り圍侵入日置五節五
 十餘騎もく獲たり兩勢互に櫓と役所小火をきく関を催し頼貞と攻り



神火
 厨川城
 宋任殿
 落て
 三つ合



前六十五

乃依之梶子ら敗走し久大を社三の園にたする八百餘騎の賊徒前後不迷しつ三
先本と謀を捨て逃走する官軍の先陣荒川公即武貞五百餘騎中北と進みつた
後阿房して凱歌よく引返るに園の上刻より亥刻のすまて二時半に賊不忠を被て
逃る者も殺を言はれ討たる所の賊徒六拾餘人官軍死傷は百十三人賊と獲る者
を九と百六十人と殺したり

亡備禮之譯

近江國住人小日置五所とつ若と將軍頼義の節候めく未壯年の勇士あり號勇ふ
して善戦ふ今度小松の兵軍も法京武道と共出揃子より攻入く遂に清方の勝利
せられたり物も五郎去來の軍に馬物具全銀を誘免傍を拂くせりつこれ瓜
見子依軍勢天晴ゆじとせま今日の花観るりかか馬物具持て了良故もせり
を捕高のりもたなれ無し徳と武士の嗜る事として吾これを感しなり將軍執んて
まひて氣色以外お扶上て終ふ所も宜しぬ所いも得も何とて終るる

そせ最で與幸はく退去せり同將軍頼義の節が方小使老をまき其物具も
男も御あつ母持るはつてびる早責たり一は清方の中へ責たりは縁成りて
款の言責たりしとせまひなる即遣くあつて即其有也て討ひつる後日の軍
小又先のてく馬物具はもめと最爽本物まの將軍又人をのりつ初の物具もや
忌りやせまはつる即清方よ春とて悉皆其領するとや此若と獲る款も實に
宛賢と捨つ実あつてはと園に宜し一は不忠なるも令ふはひ言ふ
てく討ひつる後今日小松の獲ひも何れも威毛見若れ黒草城の古物具もそ
たりなるされ將軍小松の軍小打勝く軍士瓜体の干戈を懸ん為營園小居り
清方も宗徒の清一様兵武則之宗徒代の節徒未相事く軍の後派しけり
評後果も將軍日置五郎公召く宜しなる今度小松の軍にたする物具も
最上の獲る秘藏しは越下て物具も真く銀裏と撥尺太刀刀之物の骨と切ら
瓜要るは金銀を誘免財物を獲るつとく人の目を眩しむるれとめて言ふ



使本ありて所為の物具も亡備の形もあはれ備はざる物具も失はれしとて賦
軍兵共々この國の憂はるる者たるをいふと一と半小里の谷に於ては
天よりも降る所以なり地よりも涌る限ありて幸く不出生するは
難を好む財を費は豈其多かるや突して何ぞ能く良人の一人を
んやと種兵の中此盗人なり其主堂をひざんや已小款沛方相挑ん
の財出多声たる若くは款これを固ふけくかこ小能合せり射落
二年振替打是亡備よあはれやせ堂ひねれ沛方あり合小款より
圖る人毎々感信せしとて者か一と半とて時の人結構しる物具
とて他人これを忌むなり

夜河城合戦

康平五年九月六日午刻頼義朝臣七子好勝を率く高梨宗房も
四つり賊流敗軍の標垂く陣右斜るに喜ひ好ひの勤功甚貴歎せ

即夜河を攻めんとて軍の子分あり二人の押使を定二軍の陣を固む
先ら其子共荒川を舟武貞千好勝もく同道より攻めたり一子共
頼貞子三百好勝もく上津夜河道より向一手と武則真人共子好勝
道の勇士二十人共勢二子好勝もく相の右陣也八幡殿子好勝もく
右賀茂殿八右好勝もく打せ所日未の上河国道より軍始りて下
も陣を空襲しんて幾い馬蹄沙を率く雲はく矢石空小飛く雨の
あはれも尼へりる元来は城隘路峻坦りて恰も峭函の固小越り
小拒り万進む能く能く能く能く能く能く能く能く能く能く能く能く
の道を交なれ地とく柵外の懸壁を深さ度とて十好勝ありて加
と入る小頃日露雨晴向く河の流も流りて岩穴浸く固小鳥形
敵く人力のなるべしとて小鳥形も軍勢一万好勝もく巻たれ

雅しとぞいへりる所く其日も昔なれども官軍が返りて軍いさふ最中
ら小園の下道も白りれども武則真人馬より下りて倫上誣謀をそとせ其池の分置委
見く幸治不帰を知らず活を助へ信成子とせられたる吾今河邊に到りて見ゆる小西
岸小曲本あり其枝取て河の面を去るよえ東海其身捷りて飛越ぬる吾も
にこれに強うよまき者の枝を幸ひ猿猴の跳梁する小西より日暮の煙業今夜朝霧の
津用小西に於て何是の時を待たせむとて月入ぬとて臨臨の見物にせよ小西の件の本と
信よく白の岸も波り賊の陣屋も火をひきよけよ小西に度と失んず所法十
方より攻上りはは国を破ん半必定せり疾くせやせられたる久清一隊もと及ば
領事して死生命に随ん半本の厚恩は時小西を報へ進みはるをたてて已む
陣屋も帰るぬ斯く其夜の更刻は小西清亦おちらぬ兵士二十餘人を誘ひ
果して岩迎く夢ひ夢をかきよけよと見えしる小西二十丈計小西に居る様本乃
枝葉物も解りたる白の岸も幾時ともなれば本枝中も居る所ありて

究竟の所ありて用意し持せしる藤籠の三十丈計ありとて已が腰に付し件の高
本城よりして信ひしる小西に其様尋事此者のもよとせよとて左をて道の指
上りの地より向とる時白の岸も本枝はる形も小西陣屋一所も居るなり見へ
たるがうとて見よ其間も尺符も絶く子のなる所ありてよとて久清も
わゆるまきと思ひぬるがうやと我運命は病達ありて雲朝家の聖運の所ら
とむる所あり其様とて様とて一隊今頃礼儀を吾神別して八幡三所王命あり
王命するべんがみぬる白の指も波り振り先ありて一を念して僅の指も三とて
それをかめして左右の手放放し仰る小身と鏡ありて指伸く向ふの枝も五尺
と持し指も其尾さ何れぬつてとて急ぐとて高地を去る二十餘丈ありて悉も
懇切する事とて道を纏る細と枝と若氣後進も緩くふは十尋の水た
深く命も亡ん半必定する見ゆる小西もこれ肝冷く陣も身の毛もぬまらり
とれども佛神二室の擁護もやうとて白の指も取付る不思議やう人も候



時義家掛白旗
義家合戦時
義家合戦時
義家合戦時



前六九一

あり久清の獲生をるむ地して王命神意揚せりるる貴と結さし限り
て其本平傳ひよと使よかけり枝本件の藤繩松結付らるは方本抄
たる兵は繩の端を多くかの榎本の根に結付らるは面を引渡して恰も天竺
の石橋蜀川の繩は橋を牽くこと小勝をさかして二十餘人の兵蜘蛛の絲を繰ぶ
件の繩ををり繰り小のく向の岩をぞ城するは凍り希代の拳銃するは大森内
業迎が柵をりる業迎瓜もあ家子若意みか陣小集居る其妻小婢女杯
のまを居るけり久清を安くせ思ひ入る件の柵も大とかけり小暗る山風
烈して炎十方小死散る役所も小火移るれば責任をさるぬ柵の陣中
に回忠の者あつて火をひくもこれをさるぬ小周章騒ごる久清が兵はこ
かこ小死散る煙も迷へん故共を退走く切る程小を下小七十餘騎ぞ討捕る
二方の妻子これ小機を得る運成本引退猛火の下より丸入縦横切りて責任
兄弟あつて柵子より密に脱れ散る風も落るなり八幡殿之城中騒動の極

と見ゆひ藤の故討るんと加美川を打渡すかの岩も兵を伏せぞおつるは法
晴夜の幸うまは責任を移りて大馬を子せりおとすなり八幡殿へ責任と見成
ゆひく行手夫たげり進めし責任は日本の勇猛も似て藤松と見成り進めり
八幡殿声を上臆も後を足る者も皆く返せ言んと宜ひなれは責任は八
幡殿と知りて後より進めし得りてあせんと宜ひなれは責任は八幡殿と見成り
八幡殿之責あり
夜のたぐも後ひみなり
やまひなれは責任馬の鼻瓜引せり轡を振向けたりおれ
年と終り糸のこされ乃若くさふ
そは付てらる八幡殿いりてさひの兄番する業成居てして引込りたるひ
なれは責任は虎口の死免も進めし進不居延るなり馬白り小作ひる兵は
何とて好もいりる大平の故成候し好ひるを不意なとてそを名は

四六八幡殿宣ひ多うされし年来義家が表日向より一人ぞて生きて
帰る老翁一貞任も能知法道も欽小祥をわけらば彼打れたこそ引返しく
今れ下く申はれ高代の悪敵と人いあしく欽漢あどもさる幸の志なる幸
死を希ふ事なき貞任が如く御しはひるんや杜と妻公も能くはりたる志を
感せりて一矢も射落さん幸を骨折る一旦命助されども以後十日とも育て
命ふあはれと我室ひなる実る天地を動し目ふんぬ鬼神を表せ思ひを獲
武士の公とも慰るの秋ありや古今の序小書るも理する所をわくの我の中
大將れ公操の能くわける情ふかしく感思せぬをわける事

頼義朝臣入鳥海城

柝衣門の関と貞任が弟義安信志頼六那以押外してより以来八十餘年
城は后任して官物を操先代人物を哀歎して業精才るあゆり味藤原
年々格能く尚國守一の要害たしく幾万騎の勢とひくはるるも攻落は幸

あぶらぐいと甲ひに運長時事く鐵門洞鎖の固高橋大慶の矢も忽二斤の煙
此下申空く萬株も灰燼く成りる威亡の程とや後孫たれ去程小誠後教くあはく
落りたる申に貞任も不意の命助わく直小厨川城に蓄り舎才宗任弄小
直理指ち支種法も高海柵もたて即心任は是次尻柵も入る教後物部維正安
信貞行金降道日依方等は大麻生聖長小頼原の二柵も我と進入る其弁の賊徒は
或る向後と知れは是也或は弓と伏せ甲瓜服く隊人も若く其教を知りたる
御も小將軍頼義直小名海進退せし居るをれども強次の使置るれば大麻生
野瀬原を攻落し其後鳥海城圍下とて軍勢引分ち亮秀武平を大團
妙も若く子好騎をお歸くが向ひたる同日午刻より術系も大麻生聖も共小軍
始く四方より打圍んで一人も潰さずと我攻くるる金降道日依方とて八百
騎騎もく大麻生聖も柵落しつ平を大團妙も子痛く攻まられ軍勢殺多討
せ防小柵も其日の晩系に柵も火とひ爛の下に居遠くも死するる術系の

柵先安倍貞行物部維正千好騎もく我にぞれも秀武小園並術を利するに
付死に維正柵を免して名海も落の宗経逢ふ遇く今日瀬原大藤生望也
攻敗られ安倍貞行金降通も付死に官軍許多の又勢少く攻来るや我腹痛
成隙ん物有るわぬ事まで強大も申かす程又宗任も経傳も佐とけ固兵に
大款に當らん事すまうと厨川とつ成て部を侍せられて死するもあまど我先
みと成りたり依之將軍名海の柵も入る武則も向く室ひも頃年名海忠
柵の名も固く未其後を見る事能はれぬ今日貴方の忠節もよろく我姑く
は頼み入る事と得るこれ瓜を分ち事糾さば吾顔色いり見移ひりやせさひ
々々武則畏く幕府多く朝家の物も宜く節と之而も風も梳つ雨も沐ひ甲冑
に騒風を生し軍旅も若んと後已ふ十好年天神地祇其忠誠助け勇士義平其
志を感は是故も官軍の馳奔も半信雲の腹もふくく賊衆の潰走も半後水と決
まらざりこれ幕府の武徳もあはれて唯も愚は武則鞭を振りて後も後は何の

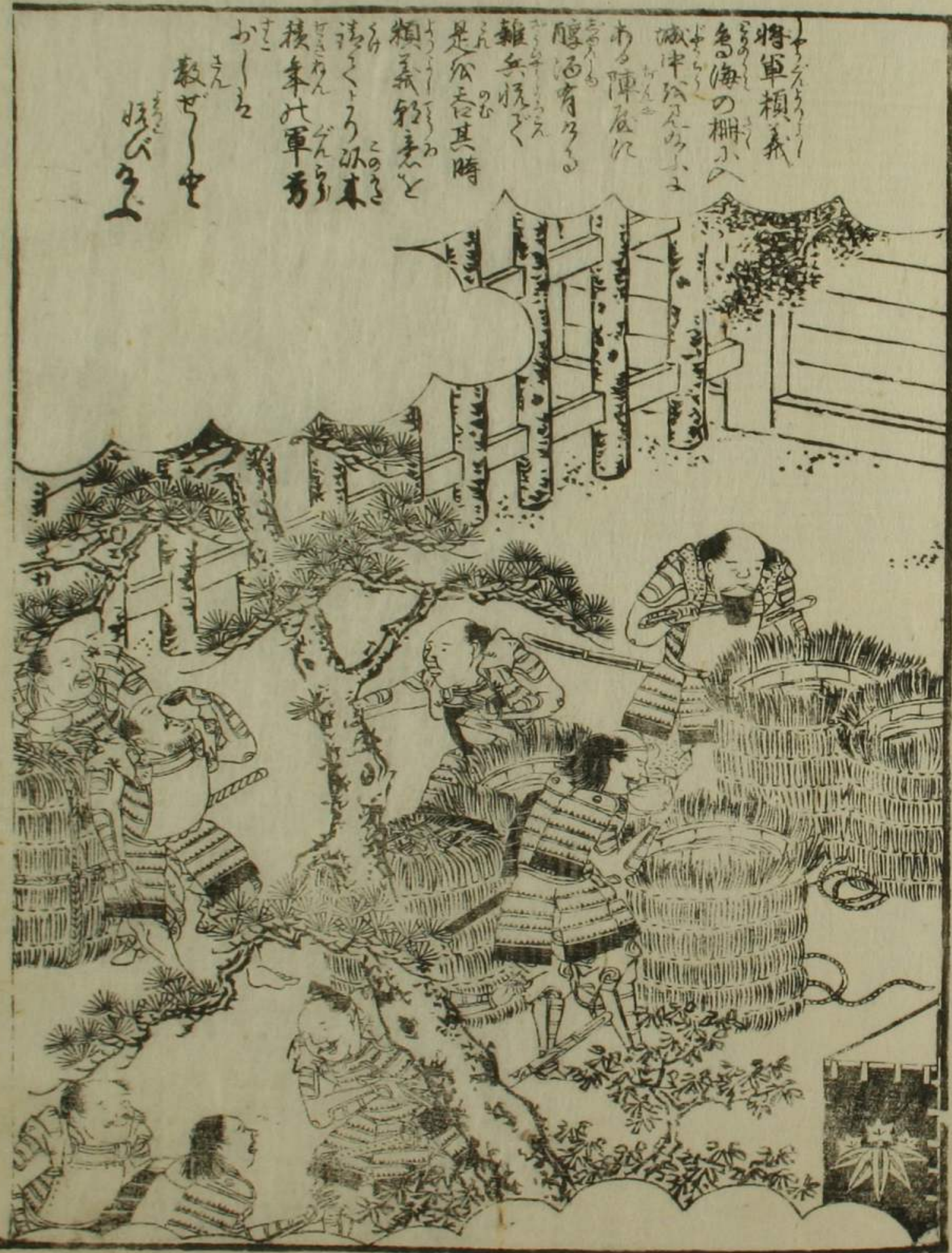
殊功ありん但幕府の恥容と見進むせ非ふ柵も入る白旗却と半思ふは厨川
の柵を破り貞任責瓜傳は望望とくくを悪く恥容肥満もあひんんやせさひりる將
軍圍むひのやと功瓜傳も半かぬ貴も子姪を率く大軍瓜敷一笠を破り後成
執り自ら矢石も中し陣を敗り城と接く半丸圍石を擲きおし是より向く吾も
通る事成得るは白旗却と悪く半の吾もたを思ひりるやせさひりる半後水
實美もあひんん武則真人傳りて拜附せり

厨川城火攻敵討死

貞任多者四郎正任が輩もく黒澤尻柵へ八幡殿を將りて二千五百好騎もく是の
ら我又鶴脛比與馬此二柵を立所家任七郎別任が居城なり程よ修死進景道荒
川を即武貞も三子好騎と相添く是もさうに即正任も八幡殿に就あり居り
聞く皆く城外もく文防も兼る俵もく惣も書もと城の中へ引込正任も
船より脱出行方とけ居りたり鶴脛比與馬の二柵も悪く攻被る宗任別任

落込たを景道も武貞も一戦中打勝つ將軍の陣中へ居るも頼我將軍三
万騎と引率して日月十六日厨門の剣着あり押厨門の分野公見々ふ其講る
形は西北の大沢に連り其澤を幸居居るに東南を大河に渡り依り水に
杭を投下り打連り河を十好丈登立して途より其内木柵を以て練陣と
高し塗る其ふ高柵百箇所を柵垂敷の統率より固見たる若
野弓を以て射倒し進死を此を磐石に打むだる柵下に進め故あり
狐波を燒殺んと捕り其の形は河に柵の中間を隙を切通して進み
差と將をせしれ天を翔る地は海ふわはん攻めん幸成難しと見
るゆふ官軍到着の時高柵の上より兵ども声々小呼りて天下の
軍の退討使うて下向りし甲斐もかいは年来攻難く津急の
こき痛りし疾攻を我々の武勇の程を見ぬひく真途の物
用とて揚ぐ善くと指たりも善子を欺んとて眉目形を賜る女

人槽の上より登り勢を漚ひ翁と翁と將軍甚懐る其の情と
善く明年み成すでもは隙を及ぼんを一定と引とせぬひ
まは十六日の未東雲より雨を降し夫合して入替り攻
方兵隊中若く弱まる者もかく矢石雨の如く射物する
者六七百人は及びつら始決いたんと退屈せし若も
思案し移ひたるは城の橋今たかくお攻を軍勢討つ
急は燒草が橋を燒ん孫子火攻の篇小火と攻依の助
時ふあはんとて士率に向くそと下知し移ひたれを
進色の村あり今在家敷十箇所噴運ひ柵の下の隙を埋
こので將軍總て馬より下り甲斐殿と遠く望み
今天威惟新する大風老居が忠を助くべし伏乞八幡
柵を焼くゆはんと則自ら火を犯し神火なりと稱して
燒けし焼けし焼けし焼けし焼けし焼けし焼けし焼けし



將軍頼義
 名海の柵小
 滅津公足あふふ
 あり陣居に
 腹は有る
 難兵候と
 是公其時
 頼義躬まど
 清くよりみ来
 積来此軍芳
 おしと
 教ぞ中
 好んふ



前六ノ九六

浮人かきとる所不何多しとなく白鳩一番花来り軍陣の上小綱子將軍再お徳を指
ありこむ八岐宮の擁護を存し所よりや憑一を我こひ路ひたるは徳大子此高橋
のうみ止せと見へし暴風忽吹来り怪煙熾り燃上ることより先官軍れ射る救ふ
表矢櫓の擁護同の板もきと義毛の如く折然と小飛船風も随く矢の羽も燃えり
並つる橋役所一時小大移され官軍これ小機を得て水攻波も遠来引込け我
くせ攻入り賊徒たひ小周章或も身と岩濤の底小投げ或も首瓜白みけし小綱
其妻妾幼稚の男女殺す人煙も咽び縮小燒も同着小泣噴くも勢柵の外も
陣分り其様五逆の罪を焦熱大焦熱の炎も焦され叫喚大叫喚のさかると勢
やせ思ひをられ兵火吹舟小熾めして官軍重々小打圍され波々出たれ道
をぬし退き此の味戸を固くする道理持たせ経法も固妙せしとる合二お二お
うせせ見へし引継く落るる逆経法を取く押へ高子小子も我拵りふ
既、將軍の陣前より引居るるは將軍其罪責責く依が先祖相傳へ

龜僕より夢み今年春朝威と怒緒一奮主孤蔑如と大逆無道とて津橋津
一必願く殊せられざる小徳也鈍さ老刀もく斬らるるこれ経法が苦痛一かじ
めんともうそれを経法と貞任が妹婿もく頓時叛逆の初より其張傘とて重恩
身も傷む威國中も擡一かとも運りて縋紐の辱も遠流穢かり身の果なる物那維
正も痛手おまき負く馬も船も半生半死小成く引か子たりしが落行勢の馬も
歸小悲らも還小死たり日未とさし身も替り命も代らんや契一即従も半
の意も疎んでははし今此橋さ小主のり方も志は別々も成く落りたる経小皆
雜兵の子小かひて駭然戰場の馬蹄小汚され辱孤天下は人口小かけられ流穢らるる
事どもなり

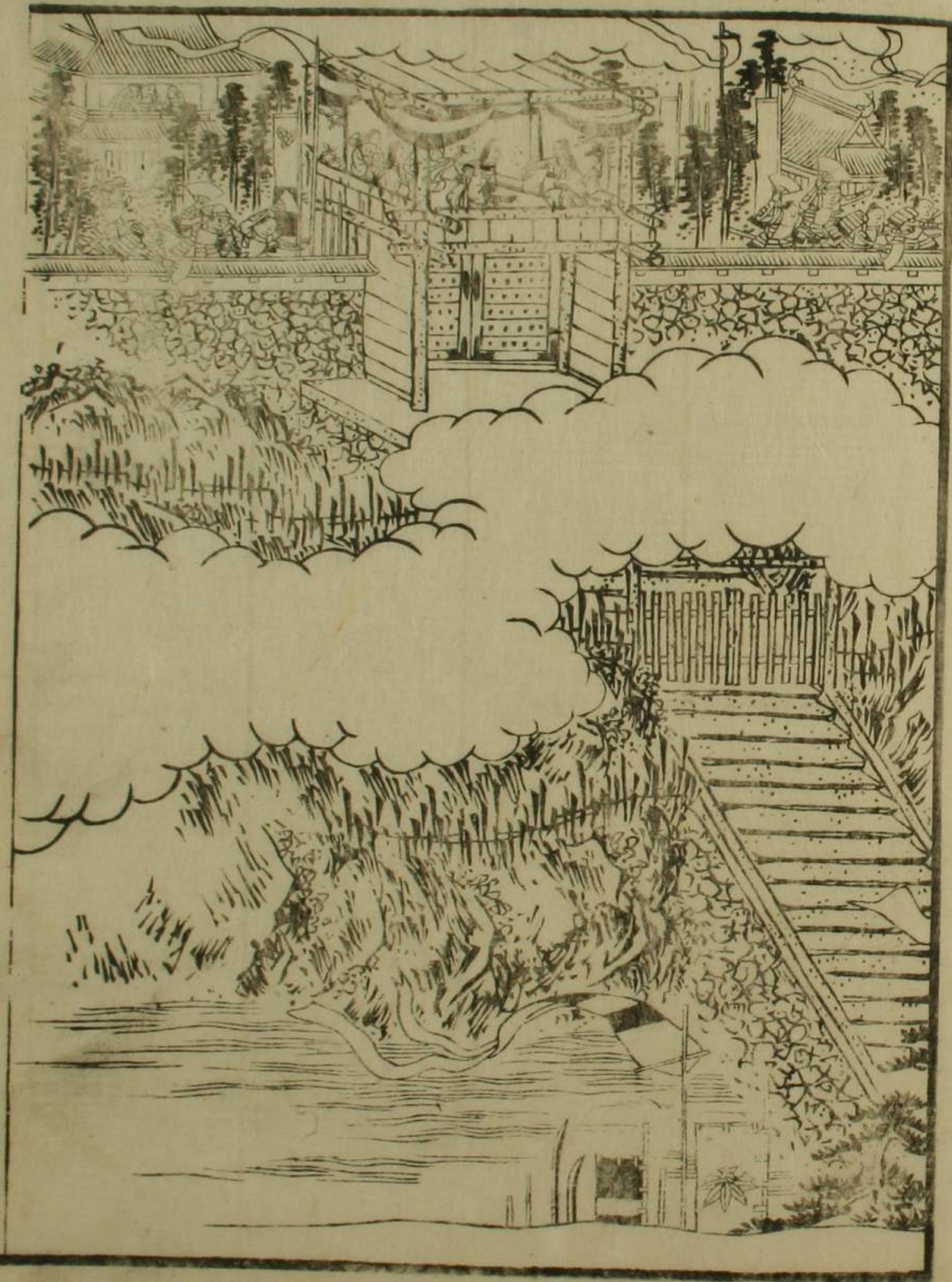
貞任死戦宗任没落

扇門の城中も軍勢悉く落失経法を初耳目も憑一兵ども大略討死し乃れ
今いば城もく功とまら半叶しゆと我人もなる宗任はくと思按し乃れ

ゆく討死せん半條は口播き次身よりいふもして迹出頼義父子の向を合つとも
秀遠死を共ありは誓懐と教むべし一ま途途と見むして籍ふ登落し此中より身
城階は泥の底に死入在右艱苦して水底に潜ると思儀も免れおなり雲子
城の中もかくる者も知らざる多し責任をいづく最後の二軍して武勇の程と
り取へし寄ふ此奴系が固然とせんといふ今おて居るは物具と隠く秘
藏して常々思ふより着替の領を出一透圓も取くて獲なる緋地の綿直衣
小押草織の履草摺長小着下し龍頭の五輪甲此緒と志光金銀狐伸るる古刀
刀十文字木撲之類高唯輪針脈高佩楯當頼貫も皆具珠を飾せり
赤白切交の赤幣護の環小結付粟毛牝馬のたぐ違さ小金度輪の鞍と志光緒
此歌かけを總小歌取取添く運兵五十餘騎を率して困りて棄出せば合身
比浦六郎重任相續くせしゆらるる貞任より身も重任が耳小申るる日來はは
も勇気よく義を專せし一族即従も命の邊に到りぬらるる一思儀

前

志と系と共討死せんとの誓あり物も不潔多し人續るるを神助るる今今
折れ去りて運兵は一戦不究りて一定智るる隊人小出魚佐若と然と家元後手
再び兵記記一歌と討んとする者も合あるゆは是後最後の事念も是我城中に
心静小自害するは此歌討つと申る志備小頼義陣小蒐令く居遠く死んや
思ふあり御意は我家陣本へ向か親ひ近付寄るをせし死共ありゆは是
父子は小討捕り今生小思ひ至幸なり相捕りは後手は申るる申るる即
圓く重任もたて居る七世へその今生の對面も唯今と限せし居るる
涙と澄の裡より兵式十餘騎と引分て申るる別まらるる貞任も猛と夫心も
俱ふ名張り物もれ志つる馬も進らるる一が此中思ひ切く二十餘騎此兵
是後左右の打圍せ將軍の本陣と目づけり寒るも我を馳せらるる官軍も貞任
自らも物もれ志つるるれは十餘年の在陣九箇年此歌も加えり討死ん物
りりけれ討死く名を死し一死と起んと我ひ申ひ進寄り一番小新方江即



御門城と攻めし官軍
 取返し討ち寄る橋より
 英女孤多く出
 森とわたり官軍
 瓜敷

三百餘騎ありて合陣美討に引退し二軍の權を即ち眞武百餘騎も切ら出
一軍して退けし二軍は藤原茂頼十餘騎も進せし眞任は相子のあひの陣敷
すべし我し官軍に十餘騎もせんれんか七騎も強し眞任を奪ふる馬を走らせ
所を責し眞任は是れは歩立ありて是れ高日將軍小進討せんや二文字に切し
なると官軍も向く進みんと志しける矢弓を以て離れし妻子は蘇伏せし
多く指し指し中引に控物し奪りける固官軍ありしは華を奪はせし
る小出洞國佐人合次十郎と勇力の若ありし武則陣を再しり眞任は紐
んとて官軍中と推分し眞任は是に壬を不きく申するは某と名しりたもの
るまは名ありしと志しける去時より力も負しやあふ是ありし時名は某と名しりたもの
儀表無人なりし引に勝負せんや之は固國の悟は事成つるものなりて左刀
指さしおきかふ十郎をくいや某と名しりた刀おる儀は眞任のいと大に引け
眞任は眞任をたしりしと志しけると志しけると志しけると志しけると志しける

と見たりと官軍も堅津を吞で足抱に稍時も揚りけし眞任は是れは某と名しりたもの
んやする若多うろろと十郎尻目も腹を他人の功と奪んとの所は眞任の引
ゆふはかた首を我のぞ他命を編あふはせしりし制しける程ふふかく某は汗
と握るは力足張踏ぐま並ぞ抑りし十郎力も勝りし眞任は是れは某と名しりたもの
必中某と上りしと志しける十郎も某と名しりたものと志しける十郎も某と名しりたもの
刀張握るは最若採合たる時刀の柄後へ引りて足さうらる瓜をとりて握るは眞任は是れは某と名しりたもの
橋の中より誰ぞと志しける眞任は是れは某と名しりたもの
十郎痛むれし眞任も抑りしと志しける眞任は是れは某と名しりたもの
上帯廻り抱りし最若のま並びく抑る藤原季俊物長頼遠くつと志しける
家く眞任は左右の時も肩腕のゆれし十文字に刺透し眞任は是れは某と名しりたもの
徳南廻りかたより退んと志しける眞任は是れは某と名しりたもの
大勢為重し殊と志しける刺しし眞任は是れは某と名しりたもの

早將軍の清茶を飲居居る貞任今年二十四其長六尺寸腰の圍七尺四寸容貌魁偉
皮膚甚肥白少して東國一の壯士なり將軍其罪を責給ふ貞任痛く教多被るるに
言て能く一面して死てがうかす所ハ八幡殿の陣より比浦六郎重任と搦免
来りたるは重任ハ八幡殿と差違て死さんそく僅二十騎其兵を率て陣小かけ
今此教かく働多きども却て八幡殿の夫先ふ我く馬より落ると官を搦免く
將軍比浦茶に引き一少早貞任死ると覺て傍伏せりけしむる小魂は消
て涙を流し居る一が即ち少く斬せり又貞任は子千世童子そく十二歳に
成りしが父が最後で陣死出の山路の供せんそく柵外小切く出た勢が中にかけて火
と教して我々官軍も少半や見ゆや半も逃げ小舎秋なるが案に相違し
て以外小切なれみか舌振ひと我は仕りける遠く武則真人これ死んそく事小搦
とてこれと一を斬せりこれを貞任父祖の代より驍勇超る一暴逆これより
まゝにかりし小皇天怒笑と降し逆小其身と亡て呼れ居賊子天孫と逆り

